

万葉の川心

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

十五年癸未の秋八月十六日に、内舎人大伴宿邇家持の、久邇の京を讃めて作れる歌
(巻第六一〇三七番歌)

今造る久邇の都は山川の

清けき見ればうべ知らすらし

子育てをしていると、人生の先輩に「今が一番いい時ね。」とよく言われる。子どもが六ヶ月ぐらいのときは、まだ歩かないから安心という意味で。子どもが二、三歳のときには単純に何をしてもかわいいため。五、六歳のときには、親としてまだまだ頼られている幸せなときとして。小学校に入ると親は忙しくて大変だけど、そこそが人生で充実している時間なのだ。中学では少し手が離れていながら、まだ家についてかわる時間が長いから「いい時」。大人になつてしまふと会う時間もなかなか無くて、巣立ちが当たり前前だけ少し淋しいからね……。自分の人生で一番いいときは、いつなのだろうか。他人が決めるものではないだろうし、人によって感じ方は違うだろうが、声をかけてくれた先輩方を見ていると「誰かに頼られ、誰かのために懸命に生きていくとき」ということではないかと思う。が、その答えは最期までの楽しみに取っておくとしよう。今で精一杯な自分にとつては、つい子どもを叱ることが多い日々だが、声をかけられたときはちよつと肩の力が抜けた気がした。時には子ども自分も(あ、連れ合いも)うまくほめられるといいのだけれど、これがなかなか難しい。

万葉集では、時折国をほめる歌が詠まれている。「新しく造る久邇の都は、山や川の清らかなことを見れば、まことにここを都として君臨なさるだろう



京都府木津川市恭仁大橋から臨む

と思われることよ。」この歌は、聖武天皇が平城京から恭仁京へと遷した新しい都を讃えている。言祝ぐというが、言葉の力で都を讃え、国の繁栄がずっと続くことを祈り予祝する歌である。そのときに欠かせないのが「山と川」だ。崇高な山々が連なること、川が清らかで瀬音が美しく響くことが、よい国栄える都の証なのだ。静かな暮らしの中で清らかな音が響くことは人の心を和ませ、思いを豊かなものにしてきた。雁、鹿、蛙の鳴く声は、川の清らかな美しさとつながっている。都を動かすということは、人が多数動き、国が大きく動くということだ。まさにこの地はそれにふさわしかったのであろう。碑は木津川の恭仁大橋の畔に威風堂々と建つ。恭仁京はわずか三年で信樂(紫香樂)宮へ、その後難波京へと移っていく。しかし、選ばれし土地であったことに変わりはない。今も恭仁大橋からの眺めは輝かしく雄大で、いつまでも見ていたくなり、時は止まった。

つらいときもうれしいときも、今を大切にしたいと思う。家族が大変なことに遭遇したら必ず助けたい。力になりたい。けれど、まずは会おうと思う。顔を見て話し、励まそう。電話で済ませるのはおかし。まして資金の援助、お金を振り込むのは、会ってからも決して遅くない。互いの「いい時」を続けるためにもと、願って止まない。